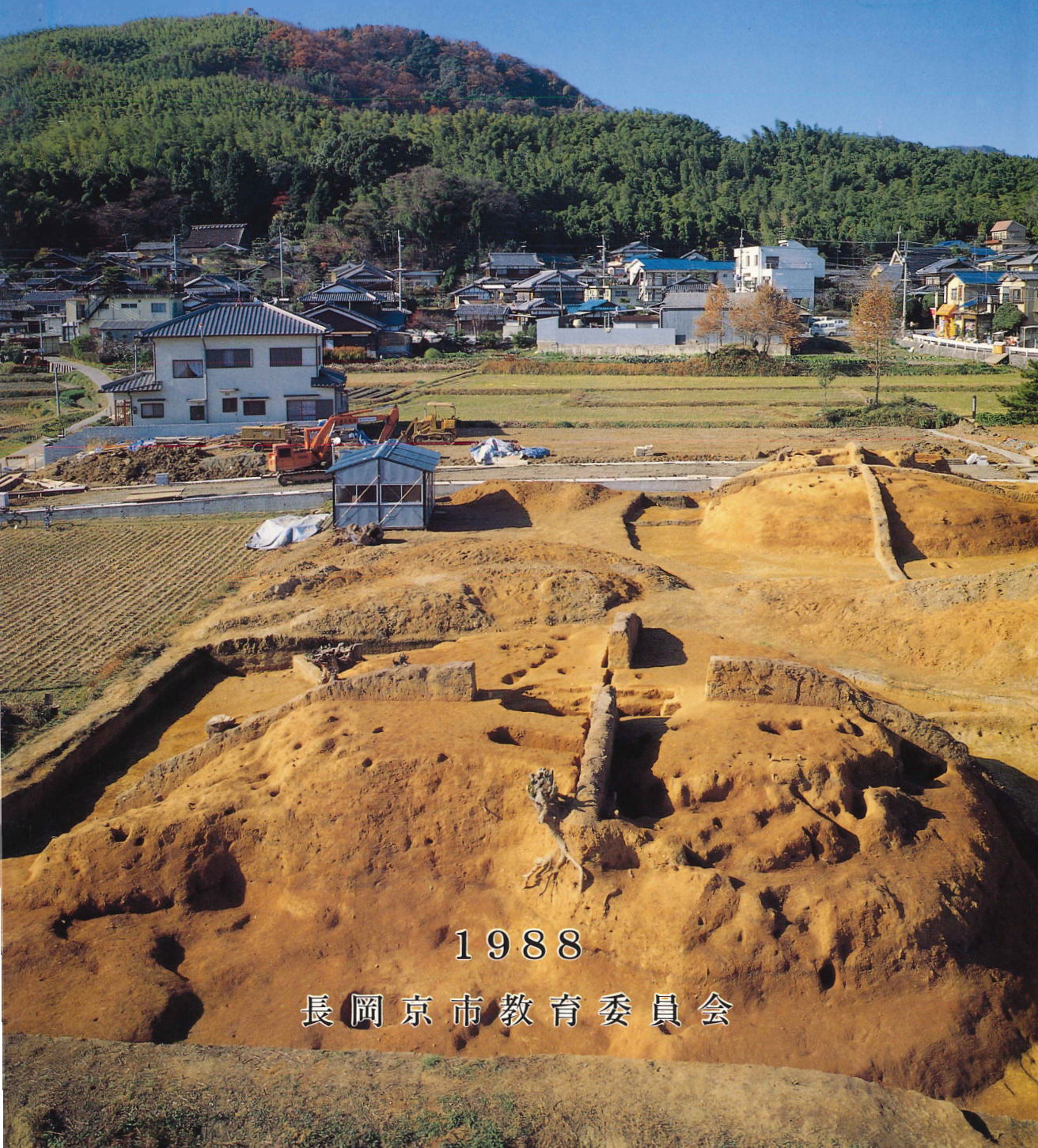
長岡京市文化財調査報告書第21冊

長法寺七ツ塚古墳群



1988

長岡京市教育委員会

序　文

長法寺七ツ塚古墳群は、本市の北西部の長法寺地区に所在する６世紀後半に造られた古墳群で、その名のとおり７つの古墳から構成されています。

７つの古墳は、ほぼ20メートル間隔で東西一列に配され、短い前方部をもつ帆立貝式古墳である４号墳を中心にその両側へ方墳・円墳がつらなっており、その姿は江戸時代の絵図にも大きく描かれております。

当教育委員会では、昭和58年度から数回にわたって発掘調査を実施し、特に昨年度実施した３・４号墳の発掘調査では、数多くの埋葬施設や様々な種類の副葬品が発見されるとともに１つの木棺内から３体の人骨が確認されるなど、当時の生活風習を知るうえで全国的にも注目される成果が得られました。

この冊子は、これらの貴重な成果をわかり易くまとめたものであり、今後、市民の郷土学習の資料として広く活用いただけることを期待しております。

最後に、調査実施に当って数々のご指導をいただいた諸先生方ならびに関係行政機関、また、発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々に紙上をお借りし、厚くお礼を申し上げます。

昭和63年８月31日

長岡京市教育委員会

教育長　湯　浅　成　治

例　言

1．本書は、京都府長岡京市長法寺北畠に所在する長法寺七ツ塚古墳群の3･4号墳を対象にした第３次調査に関する概要報告です。

2．発掘調査は、長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの調査員山本輝雄が現地調査を担当しました。

3．調査期間は、1987年９月14日から1988年２月３日までの約4.5ヵ月です。また、調査面積は３・４号墳を合わせて約720㎡でした。

4．発掘調査及び本書の作成に当たっては、多くの関係機関や個人の方々から有益なご助言とご協力を受けましたが、芳名を掲げるには数が多いため、省略させていただきました。なお、本書に掲載した写真の多くは、牛島茂氏の撮影によるものです。

5．本書の編集・執筆は白川成明の協力を得て山本が行いました。

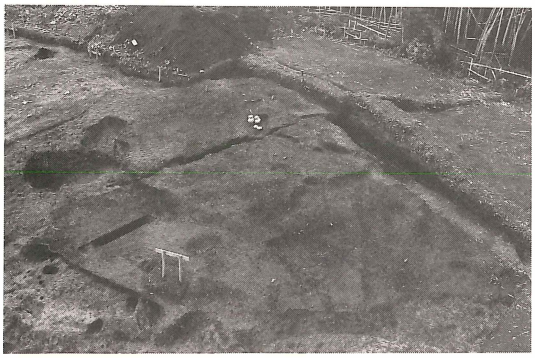
表紙：東からみた長法寺七ツ塚古墳群（手前より４・３・２・１号墳）　　裏表紙：３号墳・埋葬施設４出土の装身具類

1　位置と環境

長法寺七ツ塚古墳群は、京都府長岡京市長法寺北畠に所在しています。長岡京市は、京都盆地の西南部に位置し、古くから乙訓（弟国）と呼称されてきました。その地形を見ると、西半部が標高600 m前後の西山山地と大阪層群からなる丘陵地帯、そして東半部は河岸段丘と小畑川や桂川沿いに発達した沖積平野が広がり、おおむね北西から南東に向かって階段状に傾斜しています。桂川、宇治川、木津川の3河川が合流して淀川に注ぐ地点に近く、交通が至便なこともあって、継体天皇の弟国宮の伝承や桓武天皇による長岡京の造営、さらには山城国府が置かれるなど、古くから政治の中心地として栄えたところでした。また、この地域は京都府下でも有数の古墳が密集する所としてもよく知られており、全国的に著名な古墳が数

▲長法寺七ツ塚古墳群の位置

▲長法寺七ツ塚古墳群と周辺の古墳


▲小西古墳

▲大原２号墳

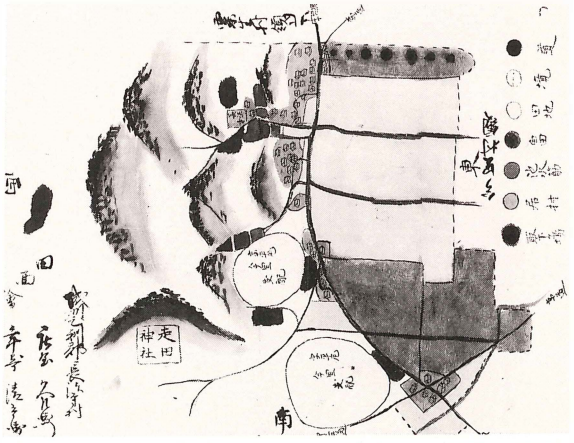
▲北平尾古墳

▲今里大塚古墳

多く分布しています。

七ツ塚古墳群の周辺に限ってみると、西側の丘陵地帯には本市で最古とされる長法寺南原古墳（前方後方墳・60m）やカラネガ岳２号墳（帆立貝式古墳・36m）など古墳時代前期から中期にかけての首長墓が築造されている他、後期の群集墳が密集しています。南原古墳群（６基）、大原古墳群（25基）、野山古墳群（３基）、稲荷山古墳群（３基）、走田古墳群（３基）、カラネガ岳古墳群（３基）などがそれで、いずれも横穴式石室を埋葬施設としています。そして、北平尾古墳や光明寺古墳など陶棺を伴う古墳も知られています。

一方、平坦地には中期に属する今里車塚古墳（前方後円墳・74m）や今里庄ノ渕古墳（前方後円墳・30m）、それに舞塚古墳（帆立貝式古墳・40m）、後期では稲荷塚古墳（前方後円墳・45m）、井ノ内車塚古墳（前方後円墳・36m）、今里大塚古墳（円墳・45m）などの首長墓が分布しています。この他、芝古墳群（７基）や小西古墳（方墳・12m）などといった七ツ塚古墳群と同様の小規模な後期古墳も存在しています。その中で、七ツ塚古墳群は平担地に立地する古墳時代後期の群集墳として位置づけられています。



▲江戸時代の絵図に描かれた長法寺七ツ塚古墳群

2　過去の調査

七ツ塚古墳群については、古く江戸時代に描かれた長法寺村田面絵図にその姿を見ることができます。絵図によれば、古墳群の周辺は畑に利用されていたようで、特に中央の３基は他の４基よりも大きく描かれていて、今日の状況とあまり変わらないことがわかります。

昭和７（1932）年のこと、道路工事に必要な土を採るために７号墳が削られました。その際、副葬品と考えられる数多くの須恵器が出土し、６世紀の中頃に造られたことがわかりました。

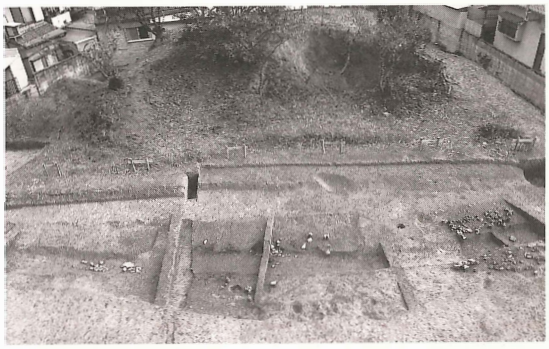
その後、昭和42（1967）年には、古墳群全体の測量調査が行われ、各古墳の墳形（円墳）や規模などが明らかにされています。

昭和56（1981）年、６号墳の一部が削り取られた時、盛土の様子を観察することができました。

昭和58（1983）年には、４号墳と５号墳の間で初めての発掘調査（第１次調査）が行われました。その結果、５号墳は一辺約20ｍの方墳で、陸橋のある周溝を伴うことが明らかとなりました。

さらに昭和62（1987）年には、２号墳と３号墳の間で行われた第２次調査によって、３号墳の墳形（方墳）と周溝の一部が確認されています。

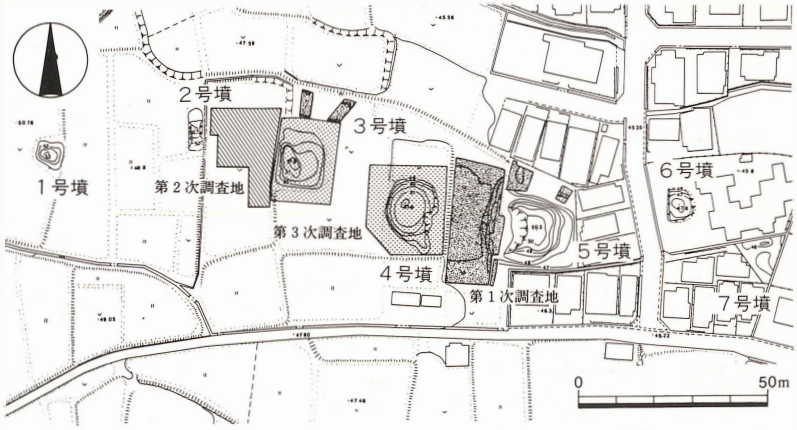
▲３号墳の周溝



▲５号墳の周溝

▲６号墳の墳丘

▲７号墳出土の須恵器



▲長法寺七ツ塚古墳群の調査地点

3　立地と墳丘

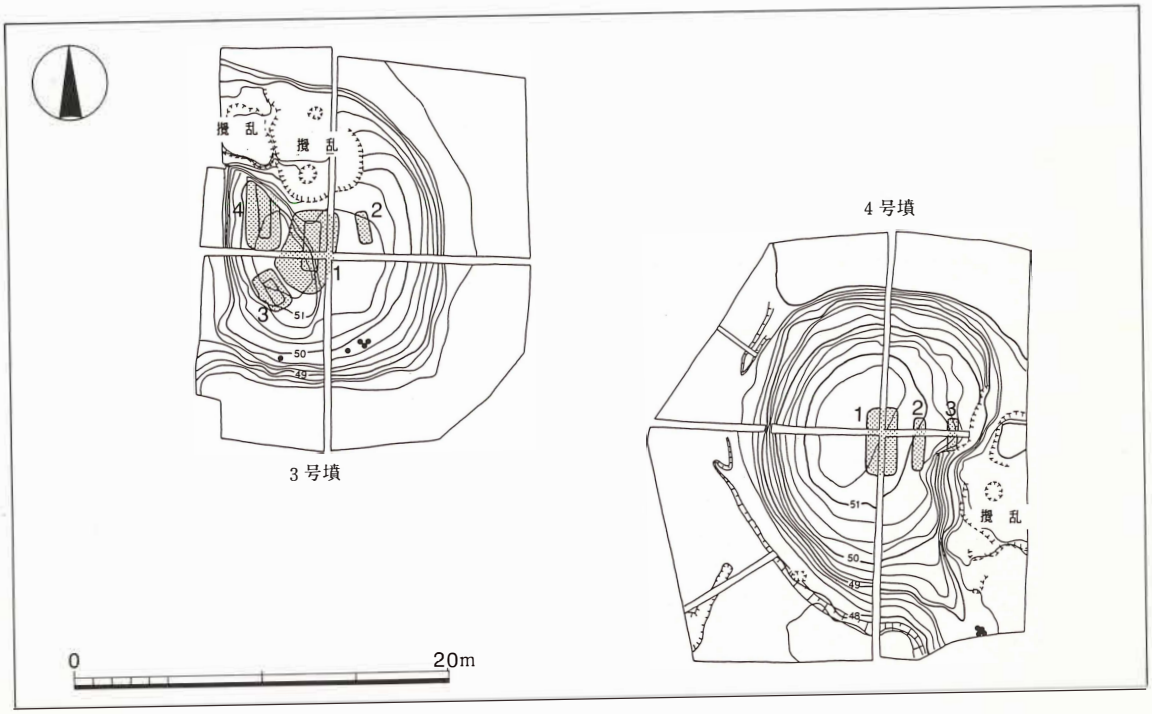
七ツ塚古墳群は、長岡丘陵の東縁部に形成された扇状地のうち、南北を谷地形に挟まれた舌状に延びる尾根筋上に立地しています。標高51～46m程の範囲内に、７基の古墳が約20mの間隔をおいて東西一列に築造されていますが、３・４号墳はその中央に隣接して並んでいます。

３号墳は一辺約15m、高さ約2.5mほどの方墳であることが確認されました。ただし、木の根や過去の開墾などで削平されているため、本来はもう少し高かった可能性があります。墳丘は、自然地形の地山を削り取って墳丘全体の４割ほどを形成し、その上に削り取った土を盛り上げて築いています。盛り土には、旧表土の黒色土や地山の黄褐色土または赤褐色土を使用し、それらを交互かつ水平に積み上げていました。こうした状況は、かって６号墳でも確認されています。また、墳丘の南斜面上から須恵器の坏身、坏蓋、甕が数点並んだ状態で出土しましたが、おそらくさらに多くの須恵器が墳丘上に供えられていたようです。

４号墳はこれまで円墳と考えられていましたが低くて短い前方部をもつ帆立貝式古墳であることが明らかとなりました。前方部は南東を向き、墳丘の大きさは全長20m以上、後円部径約16m、高さ約３mを測り、古墳群の中で最大の規模を誇っています。墳丘の構築方法は、基本的に３号墳の場合と同じですが、全体の３分の２ほどが盛り土で占められており、小型の古墳とはいえ、その築造にはかなりの労力が費やされたことでしょう。また、前方部上には、須恵器の坏身、坏蓋、壺を積み重ねるようにして供えていました。

なお、両古墳ともに墳丘の裾を巡る周溝は、過去の開墾などによって既に失われているようで、確認することはできませんでした。

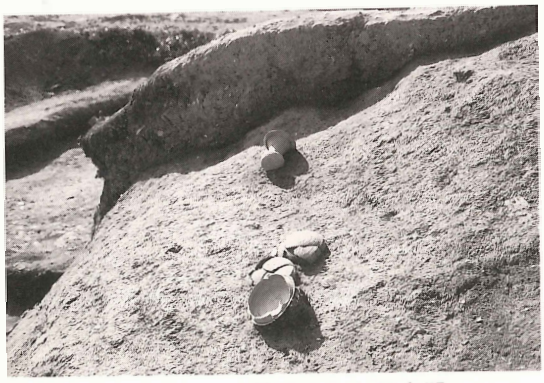
▲空から見た長法寺七ツ塚古墳群



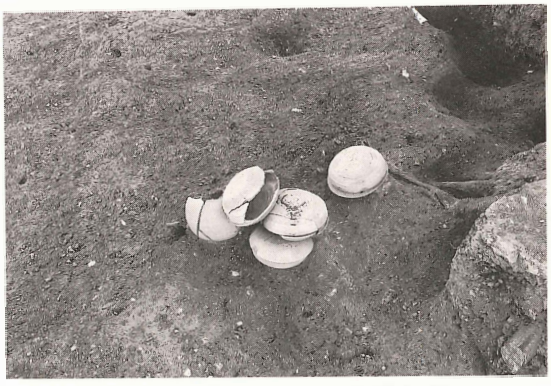
▲墳丘の測量図

▲3号墳の墳丘

▲4号墳の墳丘



▲3号墳の墳丘上に供えられた須恵器



▲4号墳の前方部に供えられた須恵器

▲３号墳の埋葬施設４

４　埋葬施設

３号墳と４号墳には、数多くの埋葬施設が盗掘で荒らされることもなく遺存していました。埋葬施設は、すべて木棺を墳丘内に直接埋置した木棺直葬と呼ばれるもので、３号墳から４基、そして４号墳からは３基の木棺が発掘されています。木棺そのものは、腐朽してほとんど残っていませんでしたが、組合式の箱形木棺と考えられます。木棺は、短辺の長さの一方を他方より広く作り、棺内に赤色顔料を塗布したものが多く確認されています。また、遺体は、頭を北側に向けたものが多いようです。

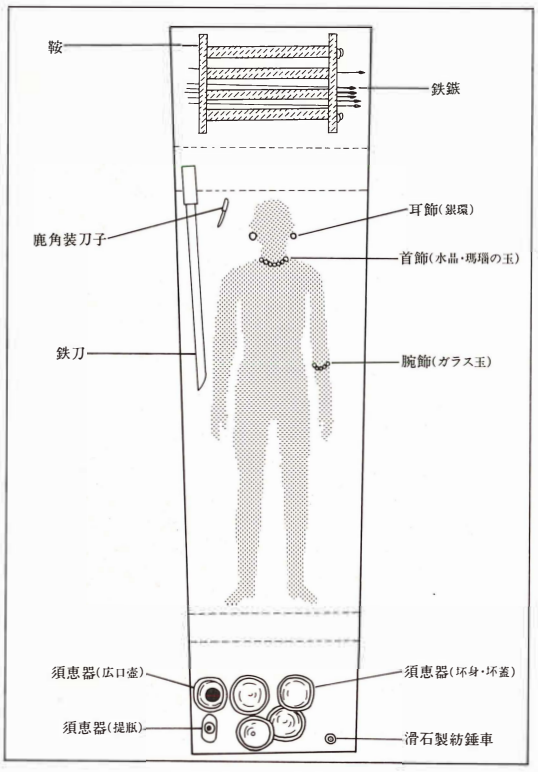
まず３号墳の埋葬施設は、墳丘の中央部に１基（埋葬施設１）とその周囲に３基（埋葬施設２～４）が配されていました。いずれも、墳頂部に墓壙を掘り、その中に木棺を安置したものですが、墓壙や木棺の大きさはそれぞれ異なっています。

▲３号墳の埋葬施設群（右から埋葬施設４・１・３）

その中で、最も規模の大きい埋葬施設１には、幸運にも人骨の一部が残っており、合計３体（成人２体、子供１体）もの遺体が葬られていることが明らかとなりました。このように、３体を合葬した木棺が見つかることは非常に稀なことで、当時の埋葬観念を知る上で注目されます。副葬品は、遺体の付近に耳環や玉類（管玉の一部は故意に割られていました）、鉄刀、鹿角装刀子などを置き遺体の北側には鉄鏃を、そして南側には須恵器や滑石製紡錘車を配していました。また、埋葬施設１の北西にある埋葬施設４でも、耳環、玉類、須恵器などが副葬されていました。人骨は残っていませんが、胸と思える辺りから鉄鏃が１点だけ出土しているので、もしかしたら戦いで殺された人が葬られているのかもしれません。この他、埋葬施設３は長さ約1.45mほどの小型の木棺で、副葬品も須恵器３点および刀子１点と乏しいことから、

▲３号墳の埋葬施設１

▲３号墳・埋葬施設１の人骨出土状況



▲4号墳・埋葬施設1の復原図

子供が葬られていた可能性があります。

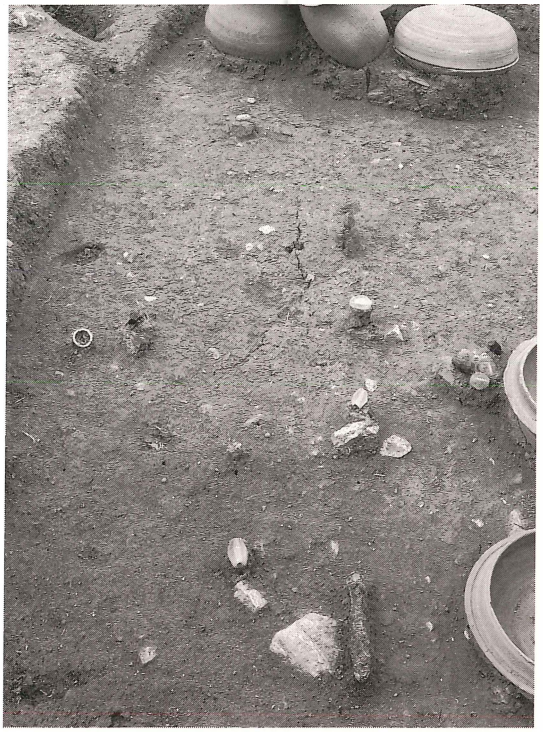
次に4号墳では、後円部の中央から東にかけて3基の木棺（西から埋葬施設1・2・3）を埋葬していますが、そのうち埋葬施設3の南半部は、残念なことに削り取られていました。3基の木棺は、それぞれ約1.2mの間隔をおいて並列し、さらに棺底の高さもおおむね揃えていました。そのうち埋葬施設1と2は、共に木棺の大きさや副葬品の配置状態が、3号墳の埋葬施設1とよく似ています。また、埋葬施設1には馬具（鞍金具）が副葬されており、生前乗馬できたほどの人が葬られているようです。この他、埋葬施設2には400点余りもの土製丸玉をはじめ、鉄刀2振、鉄鏃16点、鹿角装刀子3点、鉄鎌1点、鉄鑿1点、さらに35個体もの須恵器が副葬されていて、副葬品の数量は最も豊富でした。

▲4号墳の埋葬施設群（右から埋葬施設1・2・3）

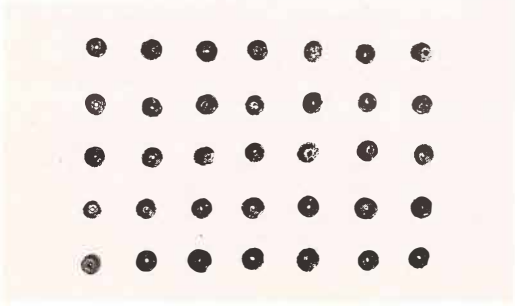
5　副葬品

３・４号墳の墳丘上や埋葬施設からは、前にも少し述べましたが、様々な種類の副葬品が出土しています。それらは、用途によって装身具、馬具、武器、農工具、土器などに分けられますが、埋葬施設ごとに副葬品の内容や数量がそれぞれ異なっていました。

まず装身具としては、耳環と玉類があります。耳環には、金製２点と銀製５点の合計７点が出土しています。すべて中実の細身タイプで、棒状のものを円形に折り曲げて作っているようです。直径が1.6㎝前後の一般的なものの他に、子供用と思われる直径約0.9㎝ほどの小型品（銀製）も１対あります。玉類は、総数600 点余りも出土しています。管玉、切子玉、棗玉、平玉、丸玉など各種があり、その材質もガラス、水晶、埋木、碧玉、

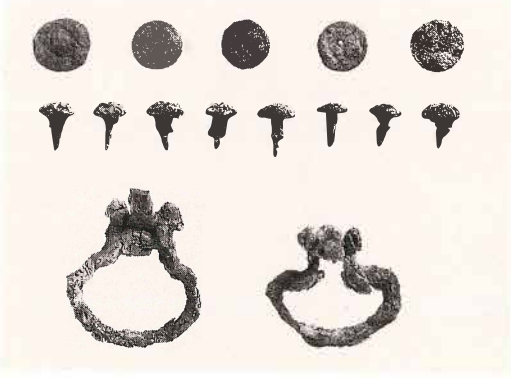


▲耳環・玉類の出土状況（３号墳・埋葬施設４）

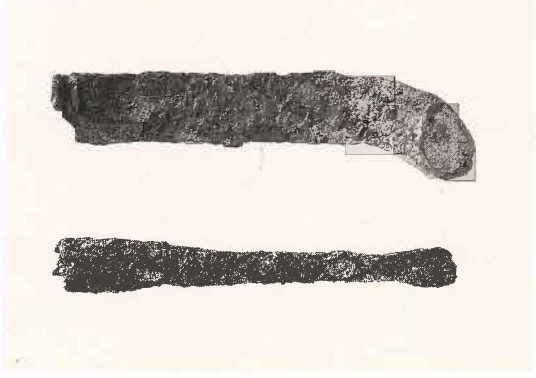


▲土製丸玉（４号墳・埋葬施設３）

▲ガラス玉の出土状況（４号墳・埋葬施設１）



▲鞍・鉄鋲（４号墳・埋葬施設１）



▲鉄鎌・鉄鑿（４号墳・埋葬施設２）

▲鉄鏃の出土状況（３号墳・埋葬施設１）

▲鉄鏃・鹿角装刀子・滑石製紡錘車（３号墳・埋葬施設１）

瑪瑙、琥珀、土など様々なもので作られていました。玉類の組合わせ方や数量は、埋葬施設ごとでそれぞれ異なっていましたが、首飾りや腕飾りに使用されたものと考えられます。

次に馬具は、木製の鞍に使用された鉄製の鞍１対と鉄鋲39点があります。鞍は、尻懸を鞍に取付けるための金具で、凸形に曲げた輪金と円形の座金具が組合わさったものです。鉄鋲は、頭部が円形もしくは長楕円形を呈していますが、直径２㎝の大型品（５点）と１.2㎝の小型品（34点）があり、これらは鞍の周縁部を装飾するために施されたものなのでしょう。

武器には、鉄刀と鉄鏃があります。鉄刀は４振出土しており、長いもので全長約100 ㎝、短いもので約63㎝を測ります。鉄鏃は30点ほど出土していますが、すべて長頸鏃と呼ばれるものです。鏃身は、両側に刃をもつものと片刃のものがあり、茎の多くには矢柄の痕跡を示す木質が残っていました。

農・工具には、鉄製の鎌１点、鑿１点、それに鹿角装を含む刀子10点などがあります。鎌は長さが17㎝ほどの曲刃鎌、鑿は着柄部が袋状になっています。鹿角装の刀子は、鹿角で外装した柄をも

▲鉄刀（４号墳・埋葬施設２）

つ刀子で、鞘にも鹿角を使用しているものがあります。

土器類には、100 個体以上もの須恵器とごく少量の土師器が出土しています。須恵器は、すべての埋葬施設と墳丘上に副葬されていて、坏身、坏蓋、高坏、埦、短頸壺、広口壺、脚付短頸壺、壺蓋、提瓶、甕、甕、器台など様々な器種があります。その中で、坏身と坏蓋の占める割合いが多いものの、壺類も少なくありません。これらの須恵器は、６世紀の中頃から後半に相当するものと思われます。

この他、紡錘車２点や鍛３点などがあります。紡錘車は、いずれも滑石製品であって、側面および底面には鋸歯文が施されています。

▲３号墳・埋葬施設３の須恵器

▲４号墳・埋葬施設１の須恵器

▲３号墳・埋葬施設1 の須恵器

▲４号墳・埋葬施設２の須恵器

6 まとめ

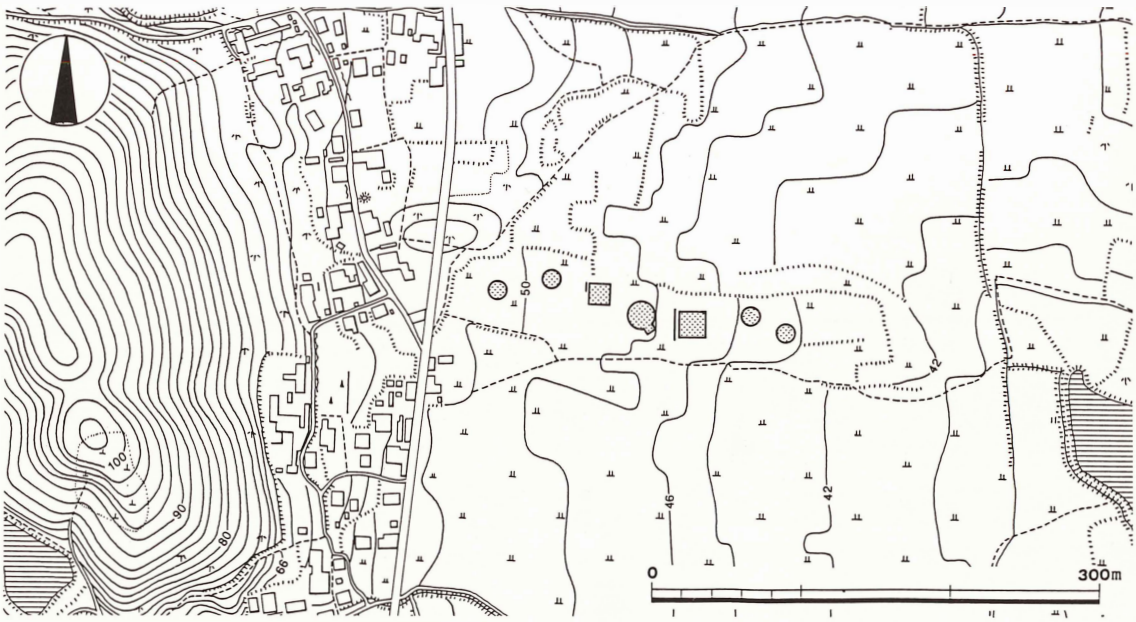
以上が、3号墳と4号墳を対象にした第3次調査のあらましですが、当初の予想を大きく上回る貴重な成果をおさめることができました。

まず、3・4号墳の墳形およびその規模が確認でき、古墳群の群構成が明らかになったことです。すなわち、中央の4号墳が帆立貝式古墳で、その両側の3・5号墳が方墳となり、さらに残りの古墳が円墳であるというこれまでの見解に従うならば、あたかも4号墳を中心にして左右対称形になるような外観を呈することになります。このことは、古墳群の形成にあたり何らかの規則が存在したのかもしれません。

次に、3・4号墳には数多くの木棺が埋葬されていて、それぞれの古墳が一つの家族墓としての性格をもっていたことが知られます。特に、3号墳の埋葬施設1で頭位を揃えて合葬されていた3遺体は夫婦とその子供である可能性があり、当時の人々の家族構成や葬送に対する考え方を知る上で大いに注目されます。

また、副葬品についてみると、その種類や数量はいたって豊富で、同時期に造られた首長墓である物集女車塚古墳（前方後円墳・45m）には到底及びませんが、小規模な古墳の中では勝れているといっていいでしょう。その意味で、葬られた人達はかなりの有力者であったと考えられます。

ところで、七ツ塚古墳群は6世紀の後半代に築造された古墳群であると考えられます。この時期は、一般に横穴式石室と呼ばれる石材を用いた埋葬施設が普及し、山腹や丘陵上に小規模な古墳が群集して造られた時期にあたります。事実、この地域の丘陵上にも数多くの横穴式石室墳が分布していることは、先にふれたとおりです。ところが七ツ塚古墳群の場合は平地に立地し、しかも木棺を直葬していることなど、大きな相違が認められます。このような差異が何によるものかは、明らかではありませんが、当時の社会がかなり複雑であったことだけは確かなようです。



▲長法寺七ツ塚古墳群の復原図

		3号墳				4号墳		
墳丘		方墳（一辺約15m・高さ約2.5m）				帆立貝式古墳（全長20m以上・後円部径約16m・高さ約3m）		
埋葬施設		埋葬施設1	埋葬施設2	埋葬施設3	埋葬施設4	埋葬施設1	埋葬施設2	埋葬施設3
埋葬施設	墓壙	隅丸長方形 東西 300cm 南北 440cm 深さ 140cm		隅丸長方形 東西 130cm 南北 215cm 深さ 65cm	隅丸長方形 東西 185cm 南北 380cm 深さ 40cm			
埋葬施設	木棺	箱形木棺 長辺 285cm 北短辺80cm 南短辺70cm	箱形木棺 長辺 180cm 北短辺60cm 南短辺75cm	箱形木棺 長辺 145cm 短辺 50cm	箱形木棺 長辺 280cm 北短辺65cm 南短辺60cm	箱形木棺 長辺 295cm 北短辺80cm 南短辺70cm	箱形木棺 長辺 280 北短辺80cm 南短辺75cm	箱形木棺 長辺 210cm 以上 短辺 50cm
副葬品	装身具	銀環4・ガラス玉1・土製丸玉82・碧玉製管玉4・水晶製切子玉4・埋木製棗玉1・不明丸玉1			金環2・ガラス小玉12・水晶製切子玉6・埋木製棗玉5・琥珀製棗玉1・碧玉製平玉1	銀環1・ガラス玉23・瑪瑙製丸玉1・水晶製切子玉4・水晶製丸玉4・不明丸玉2	土製丸玉400・ガラス小玉2	土製丸玉48
副葬品	馬具					鞍金具（鞍2・鉄鋲39）		
副葬品	武器	鉄刀1・鉄鏃6			鉄鏃1	鉄刀1・鉄鏃7	鉄刀2・鉄鏃16	
副葬品	農工具	鹿角装刀子3		刀子1	刀子1	鹿角装刀子1	鹿角装刀子3・鉄鎌1・鉄鑿1	鹿角装刀子1
副葬品	須恵器	坏身7・坏蓋5・短頸壺2・短頸壺蓋2・広口壺3	坏身3・坏蓋3・広口壺1	坏身1・坏蓋1・短頸壺1	坏身3・坏蓋4・広口壺1・提瓶1	坏身4・坏蓋4・広口壺1・提瓶1	坏身12・坏蓋11・短頸壺4・短頸壺蓋2・広口壺3・広口壺蓋1・瑯1・甕1	坏身4・坏蓋4・短頸壺1・広口壺1
副葬品	その他	滑石製紡錘車1・鎌1				滑石製紡錘車1	鎌2	

▲長法寺七ツ塚3・4号墳の埋葬施設と副葬品一覧

長法寺七ツ塚古墳群
—長岡京市文化財調査報告書第21冊—
発行日　1988年8月31日
編　集　(財)長岡京市埋蔵文化財センター
発　行　長岡京市教育委員会
〒617 京都府長岡京市開田一丁目1—1
TEL 075—951—2121
印　刷　(株)同朋舎

CHŌHŌJI-NANATSUZUKA TUMULUS

The Excavation of an Ancient

Burial Mound in Kyoto

August 1988

The Board of Education of Nagaokakyo city

Kyoto Prefecture, Japan